

## 「暫定版」における注意事項

「生物多様性保全利用指針 OKINAWA」は、令和 3 年度までに「沖縄島編」、「八重山編」、「宮古・久米島編」、「沖縄島周辺離島編」の 4 編の作成を予定しており、現在、各編について順次情報収集、調査、解析を進めているところである。このたび一連の作業が完了した八重山編について、県民の皆さまにいち早くお届けするために【暫定版】を公開する。

暫定公開である理由は、本指針の中核である生物多様性の解析評価手法の特性上、各島毎の解析ではなく、本県全体での解析を行う必要があるためである。また、事業期間中に追加されたデータを加えることで、より解析精度を高めることが想定されている。このような事業デザインのため、今回の八重山編【暫定版】に掲載された情報は暫定的なものであり、今後宮古・久米島等の情報が加わることで最終版策定まで毎年更新される。

本指針【暫定版】については、上記の事項についてご理解いただき、本県全体の解析が完了し、最終版（令和 3 年度末を予定）が策定されるまでは、引き続き「自然環境の保全に関する指針」（沖縄県 1998～2000）を参照いただきたい。

## 2. 生物文化

---

### (1) 目的

沖縄の人々は、自然の中で、自然とともに暮らしてきた。その中で、自分たちの周りの動植物に方言名をつけ、様々な形で利用してきた。これらの方言名や利用法は、暮らしに活かされる知識と知恵として先祖代々引き継がれてきたものであり、島の人々の文化である。このように動植物とつながった文化をここでは生物文化と称することとする。なお、ここでいう「生物文化」の概念は、ユネスコが定義する「生物文化多様性」につながる概念である。

「生物多様性」の保全を考える場合、生物多様性条約の目的に謳われているように、その持続的利用も考慮する必要がある。ここで自然（生物）と人（文化）との関わりの重要性が浮かび上がってくる。

本指針では、生物多様性と文化多様性のつながりとして生物文化を位置づける。生物文化は各島、各地域で異なる多様な文化であり、生物多様性に生物文化を加えることによって、地域の人々の自然利用や自然観などの手がかりを得ることができる。これらを通じて、各地域での適切な生物多様性保全と持続的な利用の検討に寄与することが期待される。

ここでは、動植物の方言とその利用について、文献に記録されている資料を抜き出し、選別し、環境カルテに記載した。

### (2) 方法

文献調査は以下の方法で実施した。

動植物の方言や利用法は字（あざ）ごとで異なる場合が多いため、まず、八重山地域の市町村内の字ごとに発刊された字誌を中心に文献調査を行い、字特有の生物文化に関する項目を抜き出した。字誌が発刊されていない地域や、字誌は発刊されているものの生物文化に関する内容が見られない地域については、市町村誌(八重山内)の調査を実施した。それでも情報が不足する地域については、八重山の民俗学的情報に関する専門書も調査対象とした。調査は、上記の字誌等に加えて、市町村誌、専門書等の205冊の文献を対象にした（第4章－5. 参考文献を参照）。

なお、対象とする生物文化に関する記載は字単位のもので野生生物に関わるものに限った。広く他地域にも見られる一般的な内容や農畜産に関する記載は、基本的には対象外と

した。

文献調査によって得られた項目は、基本的には文化庁編『民族文化財の手びき』(昭和54年4月10日第1刷発行)に従って整理分類した。ただし、生物文化に焦点を当てるため、薪、環境、景観、ササ(漁毒)、罨、イザリといった、生物を暮らしに利用する分類項目が上位にくるように分類記号の変更を行った。(表2-2-1参照)。

表2-2-1. 記載内容の分類

分類記号 ※	記載の内容	備考
A	薪、環境、景観	生物多様性と深い繋がりがある
B	ササ、罨、イザリなど(特殊なもの)	
C	衣	染め織り、装身具、身に着ける物(ジューファなど)
D	食	子どもが日常的に食べた植物の実も含める
E	住	建材、屋敷囲
F	民族知識	生物知識、生物季節の知識、生息場所の知識、スク漁の詳しいもの等
G	生業(交通、運搬も含む)	
H	遊び(子ども)、娯楽、競技	
J	人の一生、人生儀礼	
K	行事(芸能も含める)	
M	信仰、魔除け、忌避	
N	社会生活	
P	医療(薬草など)	
Q	伝承、俚諺	

※分類記号のA、B、C・・・は優先順位であり、生物多様性との関連性の強い内容をカルテに記載した。

Column

## 冬虫夏草

[文・写真：盛口満（沖縄大学教授）]

冬虫夏草というのは、一口でいうと、虫にとりつき、その虫を殺し、その虫のからだを栄養として生える殺虫寄生菌の仲間のキノコのことである。冬虫夏草と言う名前は、中国由来で、虫から生えるキノコという姿から、昔の人が「冬は虫で夏になると草になる不思議な生き物」と考えたことによっている。中国では古くから漢方薬とされ、特にチベット高原に生えるガの幼虫から生える冬虫夏草・シネンシストウチュウカソウは今でも高価な漢方薬として知られている。冬虫夏草は種類によって、とりつく虫（場合によってはクモやほかの菌類）や、生育する環境も違い、世界から数百種が報告されている。さらに、まだ毎年のように新種も発表されている。

南北に細長い日本では、北と南では見られる冬虫夏草の種類が異なっている。ただ、冬虫夏草は菌類の中でも、とりわけ湿度に富む環境を好むので、一般的には原生的な自然環境が残った森の谷部で様々な種類を見ることができる。冬虫夏草は虫にとりつく菌であることから、生態系の中の高次捕食者にあたり、なおかつ、先に書いたような生育環境を好むこともあるため、良好な自然環境が残っているかどうかを判断しうる、環境指標になるのではないかと考えられる。冬虫夏草の種類がよくみられるのは、琉球列島の中でも発達した森林の残されている屋久島、奄美大島、西表島であることも、このことを裏付けている。沖縄島の場合を見てみると、冬虫夏草の発生はやはり、ほとんどが北部に限られている。ただ、ヤンバルと



ゴキブリタケの一種（冬虫夏草の一種）

よばれる地域においても、地形的に河川周辺の平坦な森林域が発達しておらず（全体的に地形が急峻である）、河川周辺の森林はダムで水没しているところも多いため、屋久島や奄美大島などに比べ、冬虫夏草の発生環境はごく限られている。また、残された森林部の中においても、冬虫夏草の発生が見られるのは、シイやオキナワウラジロガシの大木がある程度残る、すなわち伐採後かなりの時間がたった場所に限定されるため（加えて谷部であることも必要なため）、ヤンバルの中で冬虫夏草が見られる場所は、ごくピンポイント的に限られている。

沖縄島でこれまで見つかった冬虫夏草は、代表的なセミにとりつく種類で言えば、ツクツクボウシタケ、アマミセミタケ、ウメムラセミタケ、オオゼミタケといった種類であり、種類数やその発生数はあまり多いとは言えない。しかし、沖縄島ならではの冬虫夏草というべきものも見つかり、その代表が、2016年に初めてその存在がわかった、クチキゴキブリから発生する冬虫夏草（ゴキブリタケの一種）である。本種はまだ未記載で、本土並びに屋久島から見ついているヒユウガゴキブリタケ（こちらも正式にはまだ未記載）と同種または近縁であると考えられている。興味深いのは今のところ、同様にクチキゴキブリの棲息する奄美大島と西表島からは、ゴキブリ生の冬虫夏草が未発見であることだ。

冬虫夏草については、まだわかっていないことの方が多い。発生場所も発生期も限られることから、なかなか目にとまる機会も少ない生き物であるが、ピンポイントで残る、原生的な自然の存在を示す、重要な生き物ではないかと考えられる。



ウメムラセミタケ（冬虫夏草の一種）

### (3) 調査結果

文献調査及び聞き書き調査を通じて、総数 1,982 個の八重山地域内の生物文化に関する情報を得た。表 2-2-2 に分類ごとの情報数を示す。D：食に関する情報が 238 個と最も多く、次いで、F：民族知識に関する情報が 229 個、G：生業(交通、運搬も含む)が 221 個と多かった。

表 2-2-2. 記載内容毎の収集した情報数

分類記号	記載内容	陸域	海域	合計
A	薪、環境、景観	38	3	41
B	ササ、罨、イザリなど(特殊なもの)	39	34	73
C	衣	213	5	218
D	食	185	53	238
E	住	177	19	196
F	民族知識	205	24	229
G	生業(交通、運搬も含む)	183	38	221
H	遊び(子ども)、娯楽、競技	115	19	134
J	人の一生、人生儀礼	61	8	69
K	行事(芸能も含める)	143	20	163
M	信仰、魔除け、忌避	28	3	31
N	社会生活	20	4	24
P	医療(薬草など)	141	29	170
Q	伝承、俚諺	110	65	175
合計		1,658	324	1,982

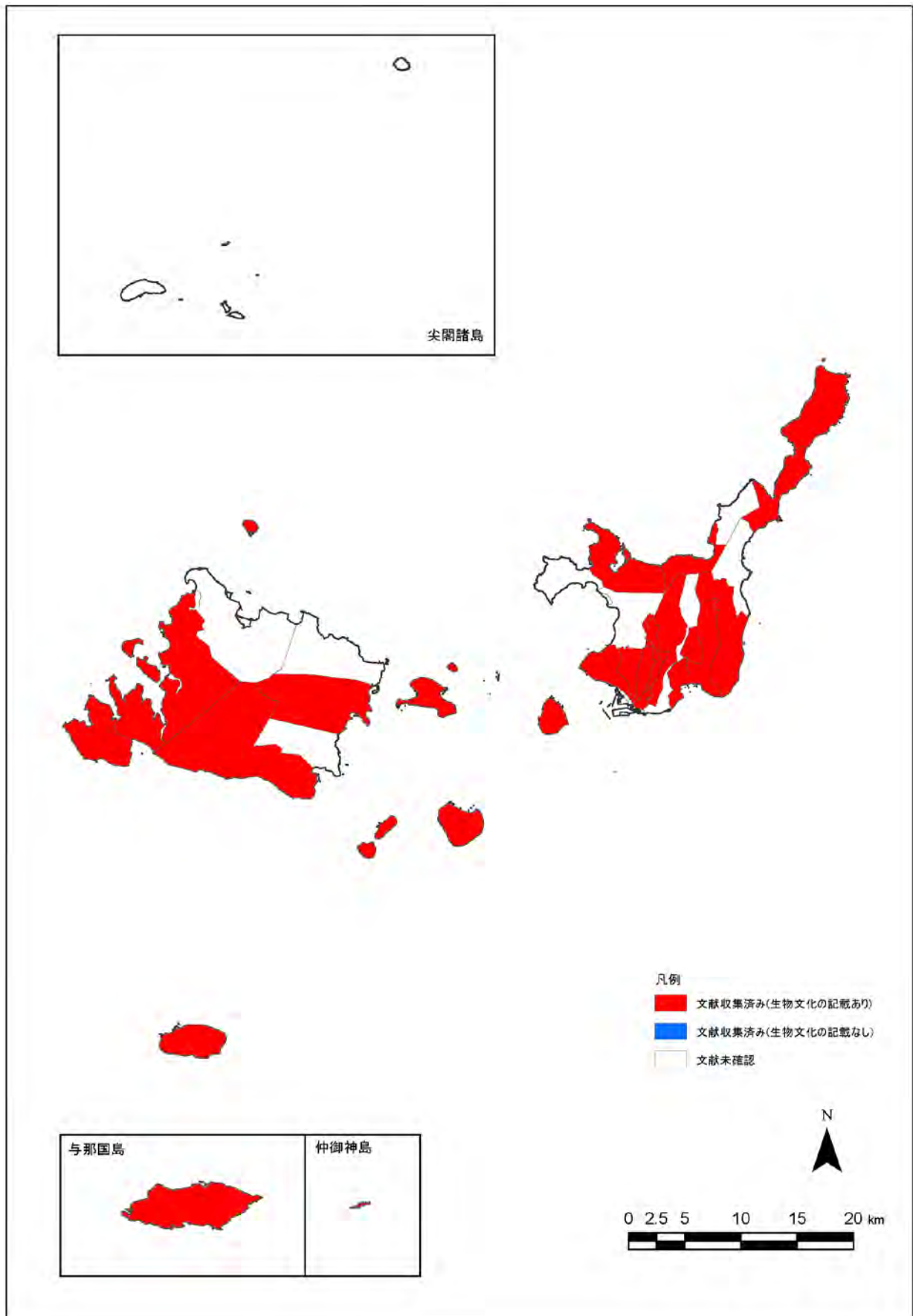


図 2-2-1. 文献の収集・整理状況(陸域)

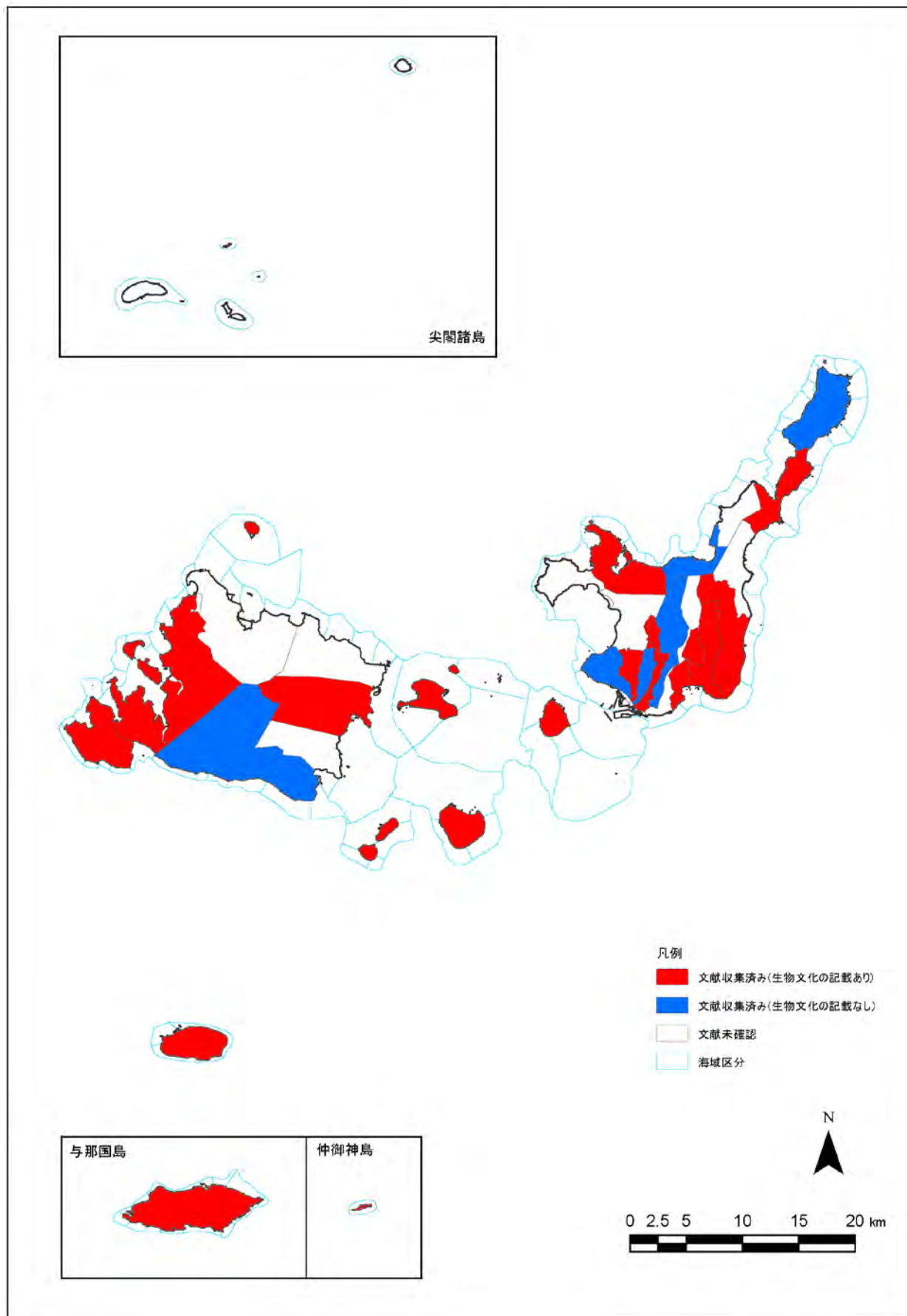


図 2-2-2. 文献の収集・整理状況(海域)



## Column

## 漂着物

[文・写真：盛口満（沖縄大学教授）]

海岸には、さまざまなものが流れ着いている。その代表と言えば貝殻やサンゴのカケラであろう。近年はプラスチック類のゴミの漂着物の増大も、世界的な問題となっている。各国産のペットボトルや外国の文字表記のある漁具が流れ着いている様を見ると、何らかしらの世界的な規制が必要になっていると思わざるを得ない。それら、様々な漂着物の中に、あまり一般的に知られていない漂着物があることを紹介したい。

沖縄島で、漂着物観察をする時期は二つある。一つは台風後の海岸であり、もう一つは冬の季節風時期の海岸である。後者で言うと、冬の季節風は北東風なので、漂着物を探すには、島の西海岸（例えば本部半島先端部や、喜如嘉、奥など）が適している。冬場は、しばしば強い季節風が吹くため、海岸に漂着物がよく打ち上がるということもあるのだが、それに加え、沖縄島の西の沖合海上を黒潮が流れているため、北東風は、この黒潮の流れに乗っているものたちを岸へ押し上げる役目も果たすのである。

そのようにして、普段は目にとめる機会がないものが、季節風によって打ち上げられる例に、外洋生のウミアメンボの漂着がある。昆虫は記載されているものだけでも100万種を越えるといい、生き物の中でもっとも多様な種類数を誇る分類群だ。しかし、その昆虫も、海洋生態系にはほとんど進出ができていない。その中で、世界でもわずかに5種類のみを数える外洋生ウミアメンボ類が、外洋表層という生活空間への進出を果たしている。この小型のアメンボは、飛ぶこともなく、一生を外洋の表層で暮らしている。そんな虫が、季節風によって打ち上げることがあるのだ。写真はそれのようにして打ち上げられたコガタウミアメンボである。外洋生ウミアメンボは海岸に打ち上げられると死んでしまい、やがて風に飛ばされたり、アリに運ばれたりしてしまい、跡形を残すことも無い。もし、季節風の吹き荒れた翌日、海岸を歩くことがあったら、足元に、こうした小さな虫がいないか気にしてみてもはどうだろうか。



コガタウミアメンボ（外洋性のアメンボ類）

季節風が運ぶ、黒潮からの贈り物にはもう一つ、南からの種子や果実たちがある。植物の中には、海流散布といって、海の流れによって、種子や果実を運んでもらう植物たちがある。それらの種子や果実は、海水に浮きやすいような工夫がなされている。例えばマメの仲間では種子の表皮が硬く、

容易に吸水しないようになっている一方、種子内に空隙があることで、海水に浮かぶようになっているものがある。その代表がモダマと呼ばれる大型のマメの仲間だ。モダマの仲間は、沖縄島北部の安田にコウシュンモダマが自生しており、これももともとは海岸に漂着したものが出自であるかもしれない。ただ、海岸に漂着するモダマの中には、日本には自生していない種類も混じっている。さらに、ジオクレアなど、グループ自体が日本には自生していないマメの仲間も、漂着物の中から見つけ出すことができる。これら自生していない植物の場合、時として漂着種子・果実の正体を判別するのは容易ではないこともあり、逆に言えば、一種の謎解きを楽しむこともできる。ビーチパーティーや海水浴以外にも、海岸での楽しみ方はいろいろあるわけだ。



コウシュンモダマの漂着種子



ジオクレアの漂着種子